

小国521  
学図

文 部 省 検 定 済 教 科 書

財 団 法 人 教 育 図 書 研 究 会 編 修

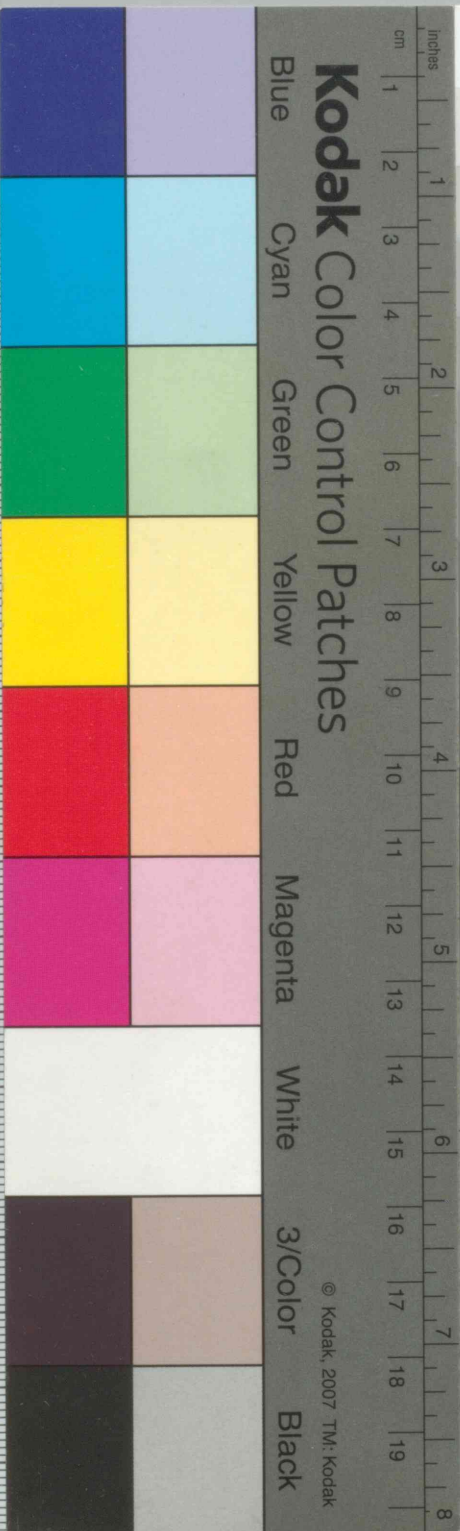
教科書  
資料室

# 五年生の 国 語 上



KC  
G16

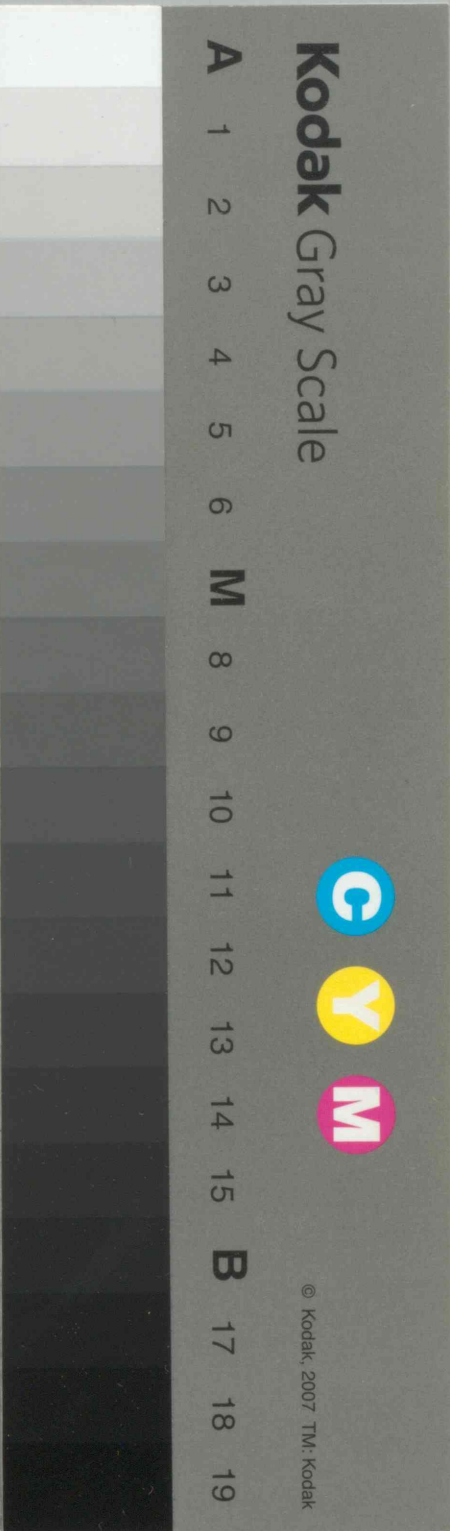
学校図書株式会社発行



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60328  
教科書文庫  
6  
810  
34-1950  
01304  
49746



寄 贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449746

昭和二十五年 月

日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 国 語 科 用

五 年 生 の 国 語 上

中央図書館

広島大学図書

0130449746



学校図書株式会社



広島大学  
教育学部図書

広島大学図書

0130449746





もくろく

- 一 あなたもわたしも……………四
- あなたもわたしも……………五
- ほんきになつて……………六
- つばめはとんでくる……………七
- 二 発明物語……………十
- 聴診器はどうして発明されたか……………十
- 望遠鏡が発明されるまで……………十六
- 三 読書会……………二十二
- 四 毎日のことば……………四十六
- あいさつのことば……………四十六

五

- お礼のことば……………四十九
- 返事のことば……………五十一
- ていねいなことば……………五十三
- ことばは言いよう……………五十七
- 五 山と海……………六十
- 静かなところ……………六十
- 富士登山……………六十二
- 海の歌……………八十三
- ことばの表……………九十五
- 漢字の表……………百



— あなたもわたしも

あなたもわたしも、みんなそろって五年生に進級することが  
できました。

空はうす緑色に晴れわたり、小鳥は美しい声でさえずり、花  
は美しくさいています。それぞれのものは、みなそれぞれなか  
たちで、それぞれのよさをどんぶんにあらわしています。わた  
したちも、それぞれ自分のよさをどんぶんにあらわそうではあ  
りませんか。



あなたもわたしも

世界のどこへ行っても

あなたもわたしも

同じ人はいない

それぞれか

人類がこの地上にあらわれてこのかた

あなたもわたしも

同じ人は生まれ出なかった

いや、これからさき人類の続くかぎり

あなたもわたしも

同じ人は生まれ出ないであろう



あなたもわたしも  
 人類のたいせつなひとつぶだねだ  
 大空にかがやく星だ  
 あなたもわたしも  
 人類の歴史にかがやかしい一ページをかざろう

ほんきになつて

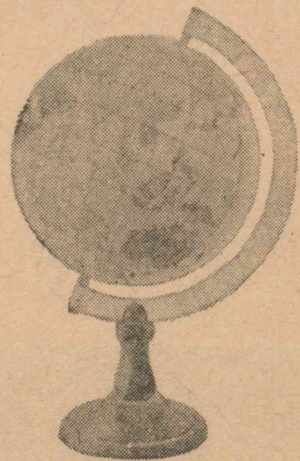
ほんきになつて  
 おさないと  
 この戸はあかないぞ  
 この戸は

つばめは飛んでくる

ひろい ひろい 空  
 小さい 小さい つばめ

青い 青い 海  
 黒い かすかな つばめ

どこまでいっても  
 なんにもない空



その空と 青く  
とけあっている海

ぽっちりと 点のつばめ  
うすく 一点のつばめ

ああ はてしない空と海を思うと  
つばめはあわつぶほどになる

そのあわのつぶも消えてなくなりそうだ  
けれど  
点の二まいのつばさには

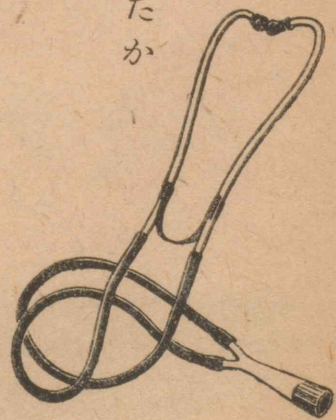
むげんの海と空とをまたぎこす勇気が  
たたまれている  
点の二つのひとみには  
地球の半分がうつついているのだ

つばめは飛んでくる  
時間のよりにまっさおな中を  
けんめいにはばたいて  
南から北へ やのように



## 二 発明物語

聴診器はどうして発明されたか



(一)

わたしたちは病気になると、お医者さんにみてもらいます。お医者さんが病気を調べるために、いのいちばんに出すのは、ガラスの細い管でできている体温計と、それから、長いゴムの管のついた聴診器です。この二つは、お医者さんにとってなくてはならない道具です。からだに熱があるかどうかは、体温計で測ります。つぎに、からだの中にどんな変化が起こっている

かは、聴診器をむねやせにあてて調べます。この病気を調べたいせつな道具の一つである聴診器が発明されたのは、一八一四年でした。一八一四年というと、フランスの皇ていナポレオンが戦争に負けて、エルバ島に流された年です。戦争が終つてまもないころのことですから、きずついたり、病気になつたりした人たちが、たくさん、パリのネツケという病院にりよう養していました。その病院に、ルネ・レーネツクというお医者さんがいて、しんせつに、このきのどくな多くのかん者さんたちの治りように従事しておりました。

ある日のこと、レーネツクはいそがしい一日の仕事をしてお家に帰ろうと、病院の門を出てしばらく歩いて行くと、広いあき地があつて、そこに数人の少年たちがシーソー遊びをしてお

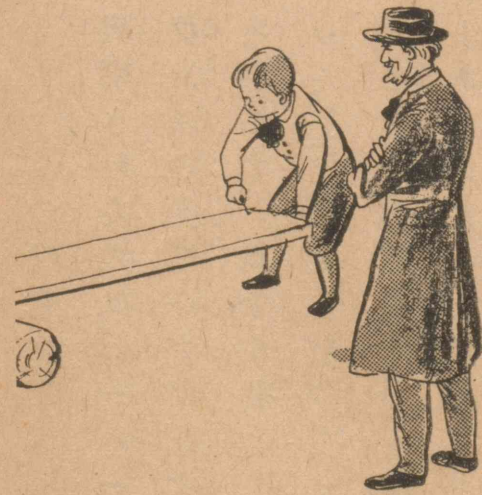
りました。レーネックはなにげなくそれを見てみると、ひとりの少年がシーソーの一方のはしへ行つて、板の上にそつと耳をおしつけました。はて、変な遊びをするものだど、立ち止まつて見ていると、もうひとりの少年が、今度は他のはしへ行つて、板の上をくぎで軽くこすり始めたのです。

「やあ、よく聞こえるよ。よく聞こえるよ。」

と、少年たちは、つぎつぎに板に耳をあてて、なにやら喜んでいました。

「何が聞こえるのだね。」

レーネックは、少年たちになかま入りして、板の上に耳をあててみま



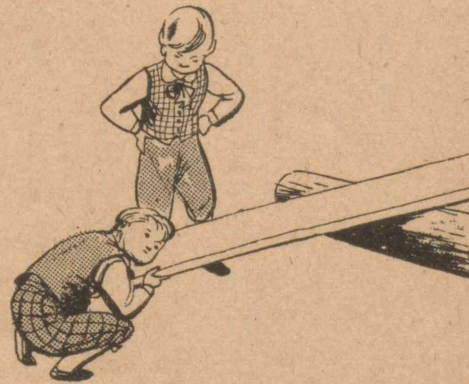
した。すると、すぐそばに立っていても聞こえないほどそつとこすつても、その音がよく耳に聞こえるのです。

「なるほど、これはよく聞こえる。」

「おじさん、よく聞こえるだろう。」

と、少年たちは得意そうにわらいました。

(二)



音は空気を伝わるばかりでなく、板もよく伝わって行きます。そして、板を伝わった方が音はよく聞こえるのです。レーネックは、少年たちがシーソーで試みていた遊びから、おもしろい



事実を発見しました。そうして、これを自分の仕事である医術に応用してみようと考えました。

からだのぐあいの悪い時は、からだの中の器官の働きに変化がある。器官の働きは音に現われる。この音を聞きとれば、からだのぐあいがどのようなものであるかということを知ることができらるだろう。音を聞きとるのに、木を使ってみようと、レーネツクは、さつそく木の管を作ってみました。そうして、それをかんの者のむねやせにあててみました。すると、やはりはっきり音が聞こえるのです。病気の種類によってその音にちがいはあることもわかってきました。

それから、レーネツクは自分で作ったこの道具を使って、こういう病気の者はこういう音がする、ああいう病気の者はああいう音がするということを知ることになり、医術の上に大きな進歩をもたらした。それによつて、どんなにたくさんの方が病気が救われたか知りません。今では、レーネツクが発明した当時のような、ただの木の管の道具ではなく、ぞうげ製の管に二本のゴム管をつなぎ、そのゴム管のはしに聴取器という耳にはめるものをつけてあります。お医者さんが診察の時に使う、聴診器というだいたいな道具は、こういうわけで、レーネツクが子供たちのシーソー遊びから考えついて発明されるにいたったものです。

○お医者さんから聴診器を見せてもらい、その仕組みを調べ、実際に使ってもらいなさい。

○聴診器が発明されるにいたったのはどんなことからですか。

望遠鏡が発明されるまで



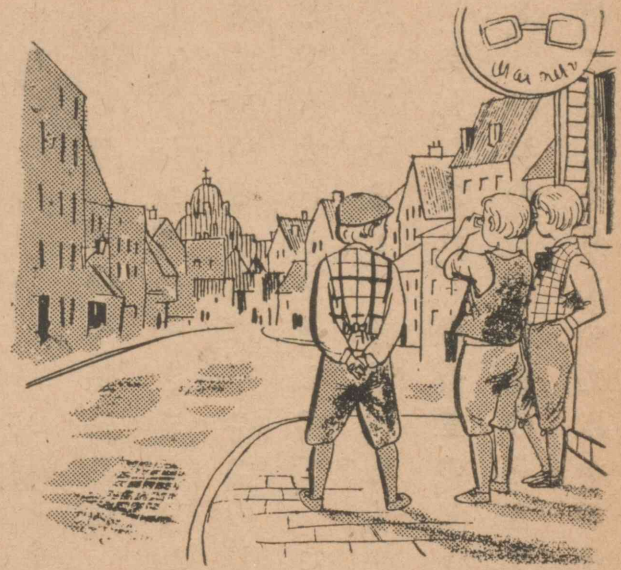
望遠鏡はわたしたちの目では見ることのできない遠い所の物を、目の前に持って来てはつきり見せてくれる役目をはたしてくれます。あの大空に光っている月や星の世界でさえ、望遠鏡をもちいると、おどろくほどはつきり見ることができます。

この望遠鏡は十七世紀の初めごろ発明されたのですが、はたして、だれがもつとも早くこれを作りだしたのかは、たしかなことはわかりません。しかし、オランダの人であるということだけはたしかなようです。

オランダのミッテルブルグに、ザカリアス・ヤンセンというめがね作りがありました。ヤンセンの子供たちは、父の仕事をよく見ているので、それをまねてレンズをいじるのが大すきでした。

ある日、この子供たちは、店にかざってあるレンズをもち出して、レンズのぞきをして遊んでおりました。おもしろがって遊んでいるうちに、二つのレンズを組み合わせてみると、物がとても大きく見えるので、これはおもしろいと遠くのものものをぞいてみると、非常に近く見えるのでびっくりしました。

「あれ、あれ、教会堂のとうが、こんなに近く見えるよ。」と、二つのレンズをのぞきながら大きな声でさげんだので、そばでそれを見ていたほかの子供たちは、そのそばへかけよって、



「見せて、見せて。」

と、レンズのうばい合いが始まりました。そのさわぎを聞いて仕事場からとんで来た父のヤンセンは、「こらこら、そのレンズをもち出してはいけない。そのレンズをいためてはたいへんだ。」

と、レンズを取りもどそうとする  
と、子供たちは、

「おとうさん、おもしろいことがあるんですよ。レンズを二つ組み合わせて、それを適当にはなしてのぞくと、あの向こうに見える教会堂のとうがとても近くに見えるんですよ。」

と言うので、父のヤンセンは、

「ええ、なにに、そんなことがあるのか。」

と、子供たちがやって来たようにして、教会堂のとうを見ると、とうは大きくま近に見えます。ヤンセンは、これはふしぎだ、便利なめがねができるぞと、さっそく板の上に二まいのレンズをならべ立て、そのレンズの間のへだたりを適当に変えることができるようにしました。こうして、ごくかんたんな望遠鏡が発明されました。

ところが、望遠鏡を発明したのは、ヤンセン親子ではなく、やはりオランダ人でめがね作りの、ハンス・リツパシエトだという人もあります。リツパシエトもレンズをかさねてみるうちに、思いがけなく遠くのものが見えるのを発見し、そ

れから望遠鏡を発明するようになったということです。

さらに、もうひとりの発明者として伝えられているのは、これもオランダ人の、ジェームス・メティウスです。はたして、この三人のうちだれが最初に発明したかということは、しつかりしたしようがないのはつきりしませんが、いずれにしても、オランダ人によって発明されたことはまちがいないようです。

オランダで発明されたこの望遠鏡は、初めひみつにされていたのですが、どこからそのひみつがもれたしたのか、オランダに「まほうレンズ」が作られたといううわさになって、ヨーロッパの国々にひろまっていきました。

そのころ、イタリアにガリレオという有名な科学者がいました。ガリレオは「まほうレンズ」のうわさを聞くと、レンズを組み合わせて作ったものにちがいないと、いろいろとレンズを組み合わせてくふうし、とうとう望遠鏡を作りだしました。ですから、ガリレオも望遠鏡の発明者のひとりだといえるわけです。ガリレオは、この自分で作った望遠鏡を用いて天体を調べ、初めて星の世界のひみつをさぐり、天文学はもちろんのこと、科学の進歩に大きなたげを立てました。この意味で、かれこそは望遠鏡の本当の生みの親だといわねばなりません。

○聴診器、望遠鏡はどんなことから発明されたか、またこの発明はどのようなことに役だったか、調べてみましょう。

○このほかの発明物語も読んで、そのあらすじをノートにまとめ、お友だちによくわかるように発表しましょう。

### 三 読書会

「学校の図書室の本を整理いたしますから、しばらくの間、図書室にはいらないようにしてください。なお、図書室の本をかりている人は、早く図書室へ返してください。」

と、月曜日の朝礼の時に、図書委員からの話があり、今週の読書日に図書室へ行けなくなったので、わたしたちの学級では、その日に学級読書会を開くことにしました。

そこで、こんどの読書会には、これまでに読んだ本の中から、おもしろかったもの、ためになったものを、だれかに読んでもらうことにしました。読み手は、みんなからのすいせんで、高

木さんと、原田君と、山田君、司会者は図書委員のひとりである大川君に決まりました。

読書会は、司会者の大川君の考えて、運動場のすみのさくらの木の下で開くことになりました。先生も、

「それはいい思いつきだ。」

と、みんななどいっしょにさくらの木の下へこしかけを運ばれました。ここは教室とはちがいで、すずしい風がそよそよとふいて来て、とても気持がいいです。ふと見ると、さくらのわか葉をもれる午後の日光が、地面にぼつぼつとおもしろいもようをえがき、みんなの顔にも光がちらちらうつります。

「みんな集まったようですね。」

と、先生はわたしたちの顔をひとりひとり見まわされました。  
司会者の大川君は、

「もう始めようか。」

と、小声でそばの人にたずねてから、静かになつたところをみ  
はからつて、立ち上がると、

「きょうはこのすずしい木かげで、楽しい学級読書会を開くこ  
とになりました。高木さん、原田君、山田君のじゅんに読ん  
でいただくことにします。みなさんよく聞いてください。」  
と、開会のあいさつをのべました。

どこから来たのか、もんしろちようが、わたしたちの頭の上  
をひらひらと上がったたり下がったりして、飛びまわります。

「ああ、ちようちようが見物に来たぞ。」

と、だれかがつぶやいたので、くすくすとわらいがひろがり、  
そのざわめきにおどろいたように、もんしろちようはまたひら  
ひらと飛んで行ってしまいました。

後の方にいた高木さんは、美しい大判の本をかかえて前に出、  
本の間から一まいの写真を出して見せました。

「これはスイスという国の写真です。高くそびえている山は、  
有名なアルプス山脈です。これから、この美しい国を、みな  
さんにしようかいしようと思います。」  
高木さんは、静かに読み始めました。

### 山の国スイス

ヨーロッパの中部にあるスイスは、アルプスの高い山々が国

の半分をしめていますので、人々の住む所は、アルプスと北の方の山地との間の高原か、アルプスの谷間しか残されていません。耕地も国全体のわずか十分の一あまりしかなく、しかも、高原や谷間は気温が低いので、農業には適しません。人々は牧ちくに力をそそいでおります。たくさんのにゆう牛をかって、季節によつて、アルプスの山を登ったりくだったりして、牧草をもとめて歩きます。山の雪



がとけて、わか草がもえだしますと、うしをひいて山へ登ります。そうして、半年余りも山小屋に住んで、山に雪がふりだす秋にならなければ帰つて来ません。質のよいバターやチーズは、このにゆう牛のちちから作りだされます。

また、スイスは、山国でありながら、工業がさかんです。動力としては、大部分はアルプスの水力電気が利用されており、住民の半分近くが工業に従事しています。

スイスの工業の特色は、軽くて運ばんに便利な、しかも高価な物が作りだされていることにあります。時計や絹織物類、化学製品などがそれで、とくに時計は名高いものです。

時計の製作には、細かい技術とともに、空気がかわいていてきれいなことが必要です。スイスは、その点、よく時計の製作



ております。氷河にかかる白いのがったアルプスのみねみね、青くすんだ湖、それにうつる山々のすがた、ぜっぺきにかかるたき、緑の牧場など、そのままの景色が絵になり、詩になります。

に適しており、この国でできた時計は、さかんに外国へも輸出されて、スイス製として、世界の人々に喜ばれています。

スイスは山国であり風景が美しいので、世界の観光地となつ

す。世界の各地からたくさんの方が集まり、夏は登山やひ暑でにぎわい、冬はスキーやスケートの楽しみがくりひろげられています。それで、ホテルや、案内、登山電車など、よくとどえられています。山国とは思えないほど鉄道も発達し、世界でも指おりの長いトンネルがいくつもあり、また、鉄道の大部分が電化されています。

スイスは小さな山国ですが、このように産業・交通が発達しており、民主的な政治が行われて、人々はみな楽しくくらししております。ですから、スイスはよく世界の楽園といわれます。

高木さんが本を読み終ると、

「その写真をよく見せて」。



と、後の方でよく見えなかった人の中には、立ち上がる人もありました。先生は、

「日本の国も、今のお話のスイスのように、世界の楽園といわれるようにしたいですね。高木さんの持って来た写真は、しばらく教室にかざっておいてもらいましょう。」

と、おっしゃったので、後の方にいた人たちも静かになりました。大川君が、

「つぎは、原田君にお願いします。」

と、進行させましたので、原田君は、バットとボールを持って立ちました。

「原田君、本を読まないで野球をやるの。」

と、だれかが言ったので、みんなわつとわらいだしました。原

田君はからだが大きく、野球がじょうずで、組のピッチャーです。バットでボールをたたきながら、

「ぼくは野球が大すきだから、野球の話を 읽みます。」

と言いましたが、原田君は本を持っておりません。

「原田君、本はどうしたの。」

と、大川君が心配そうにたずねると、

「ぼくは野球の話がざっしに出っていたので、それを読書録に書きとって来ましたから、それを読んでみます。」

と言って、ポケットから読書録を出して読み始めました。

### フェアプレー

野球のおもしろみというのは、ボールを投げたり、受け取っ

たりすることだけにあるのではあり  
ません。ボールをカーンと打つこと  
におもしろさがあるのです。

アメリカの子供たちは、「野球をや  
ろう。」という時には、かならずバッ  
トとボールを持って出て来ます。み

なさんも、これからはぜひ、キャッチボールにばかりむちゅう  
にならないで、バットを持って思いきりボールを打つけいこを  
なさい。

ボールがバットにあたつて飛んで行く時の気持は、なんとも  
いえないういものです。ボールを思うぞんぶんに打つのは、  
あまり大きくて重いバットはよくありません。みなさんの方で



自由にふりまわせるくらいの大きさと重さのバットを使うこと  
がたいせつです。みなさんがおとなの使うバットを使っている  
のをよく見ますが、あれは感心できません。それから、おとな  
の使うような大きなグローブを使つてはいませんか。もし使つ  
ていたら、それもよくありません。グローブもやはり、みなさ  
んの手によくあつて、使いこなせる大きさのものを使うのがよ  
いのです。そうして、ボールに向かう時には、受けとめようと  
いう気持でなしに、つかみ取るうという意気ごみで取つてくだ  
さい。

もう一つ、たいせつなことをつけ加えましょう。これは、か  
んたんなことです。速く走れるようになることです。走ることは  
はすべての運動のもとになることです。アメリカでホームラン

王と言われたベーブ・ルースという人も、野球にとってたいせつなことは、ランニングだと言っております。ランニングというのは、日本語でいうと、「走る」ということです。ピッチャーがボールを投げるにも、足のばねが非常に大きい役目をします。また、バットをふるのにも、足がよわくはふらふらして、よくふれませんか。どうしても、足を強くして、こしから下の力がふらつかないようにすることが、たいせつです。足のばねがきくと、打つボールがよく飛びます。そのほかゴロをとる時にも、フライを受け取る時にも、足の速いことがたいせつです。

それから、野球の試合をする時には、勝ち負けにとらわれず、ゆ快にやること、しかも最後まで自分たちのありったけの力を出すことをわすれないようにしましょう。九回の二死後になっ

てから試合がぎゃくてんした例は数えきれないほどあります。ですから、試合の中とで負けそうになっても、力を落としたり、あきらめたりしてはなりません。規則をよく守って、正しくきれいな試合をしましょう。不正な方法で試合に勝つよりも、むしろ、ベストをつくして負けた方がましだということを、しっかり覚えていてください。このことをフェアプレーと言います。フェアプレーを愛する心は、みなさんがおとなになってからも、たいせつなことであり、それがほんとうに野球を愛することです。あります。

原田君が読み終ると、先生は、

「みなさんのすきな野球の話なので、おもしろく聞きましたね。」

フェアプレーを愛する心は、野球ばかりでなく、どの運動にも  
もたいせつです。そればかりでなく、わたしたちの生活にも  
またたいせつなことなのです。そのことを、よく考えておい  
てください。

と、にこにこしながら、つけ加えられました。大川君は、先生  
からおかりしたうで時計をちよつと見て、

「きょうは、おもしろい読書会なので、時間のたつのが早いで  
すね。つぎは山田君にお願いします。」

と言ったので、山田君が立ちました。山田君は、わたしたちの  
組でいちばんの物知りです。いつもめずらしいことを学級新聞  
に書いてみんなに知らせてくれます。

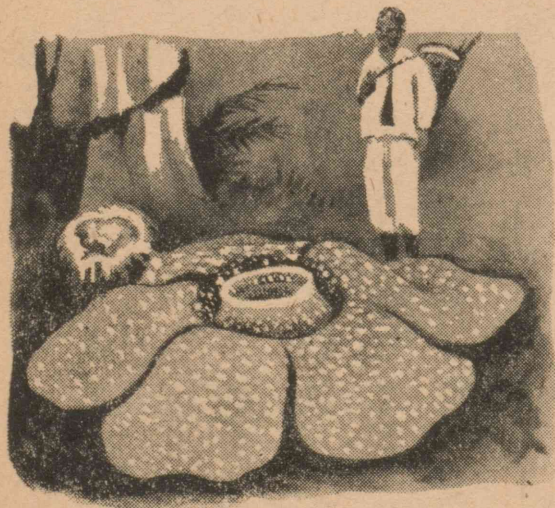
「これはぼくのちえぶくろです。」

と言つて、山田君はあつい本を開いて読み始めました。

ちえぶくろ

(一)

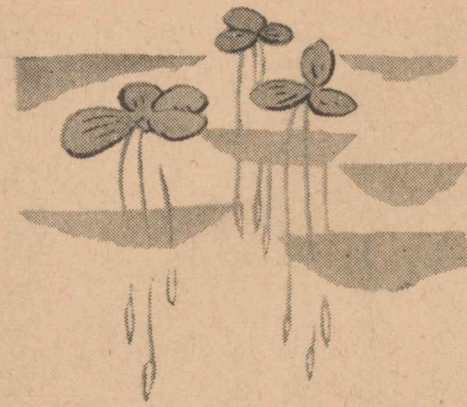
世界でいちばん大きな花は、<sup>ラフ</sup>ラフ  
レシアという植物の花です。直径約  
一メートルもあります。ただし、こ  
の植物はふつうの植物のようなくき  
も葉もありません。いわば花ばかり  
といつてもいいような、変わった植  
物です。そして、この大きな花は、  
地面の上を上を向いて、べつたりね



ています。このラフレシアはボルネオなどの森の中にはえていて、その名は、シンガポールを建設したラッフルスという人の名をとってつけられたものです。

つぎに、世界でいちばん小さな花は、ミジンコウキクサという草の花です。池の水などにいるミジンコみたいにくさくさして、

まるで、水の表面に細かい小麦粉でもまいたようになつてういています。一種のうきくさですが、草の全体の長さが一ミリメートルの五分の三ぐらいしかないのですから、二十倍の虫めがねで見ないと、よく形がわかりません。このミジンコウキクサは、世界中にひろがっています。日本にも方々の



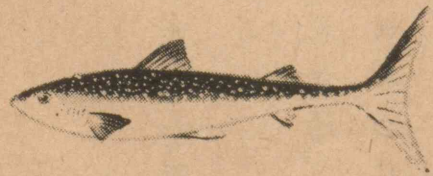
池で夏から秋にかけてよく見うけることがあります。

(二)

世界でいちばん大きな魚はジンベザメというさめです。長さは約十八メートル、中にはそれ以上のものもあります。これはくじらとたいしてちがわないくらいの大きさです。

このさめは日本の近海にもいて、時にはあみにもかかります。

また、いちばん小さい魚は、フィリッピンのルソン島の、あるいりえにいるパンダカという小さなはぜで、おすは長さ約九ミリメートル、あるいはそれ以下の小さいものです。日本の魚としては、海にいるもの



では、長さ約十五ミリメートルのイソハゼで、ま水にいるものではメダカがいちばん小さいでしょう。

(三)

わたしたちの住んでいる地球に、高い所や低い所や平らな所のあるのは、なぜでしょう。

地球は太陽から引きはなされて生まれたといわれています。初めは、温度の高いガス体で、自分で光をはなっていた一つの星だったのだそうですが、だんだんひえて、えき体となり、固体となったと考えられています。

この固体になる時に外側からかたまつて、まず表面に皮ができて、その皮がさらにちぢまるものですから、しわができてきます。これが山脈です。しかし、わたしたちが今見る山や谷など



は、地球がかたまつた最初のころにできたままではありません。何億年あるいは何十億年という長い長い間に、地球の内部から火山がふん出したり、土地が上がったり、下がったり、地しんが起こつたり、また雨がふつて池や川ができたり、海ができたり、雨や風や川などの力で、谷や平野などができたりしたのです。アルプスにしても、ヒマラヤにしても、また富士山にしても、みなさんの住んでいる近くの山にしても、このような作用のどれかによって

できたものです。

このようにしてできたヒマラヤ山脈のエベレスト山は八千八百メートル余りもあり、フィリッピン群島東側のいちばん深いといわれている海の深さは、一万メートル余りもあります。しかし、このような地球の表面の高さや深さは、一万二千七百キロメートル余りもあるという地球の直径に比べると、ほんの小さなものです。たとえば、直径一メートルの球の表面に、わずか一ミリメートルたらずのでこぼこができたと同じようなものです。地球の大きさに比べたら、山や海のでこぼこは問題になりません。

山田君は本をとじました。みんなめずらしいことばかり聞いて

たので、ちえぶくろが大きくふくらんだような気がしました。

このあと、きょうの読書会について、読まれた内容のことや、読みぶりなどについての意見や感想の話し合いをしました。先生からは、読書の仕方についてのお話がありました。その要点をまとめてみます。

一 本を読むことは、食物を食べるのとよく似ています。食物をむやみに食べると、おなかをこわしてからだのためにならないように、どんな本でもかまわずに、むやみに読むことは、ためにならないばかりか、毒になります。よい本を選び、よく読みこなして、心の栄養になるようにすることがたいせつです。

二 日光のあたる所で本を読んだり、暗い所で本を読んだり、

乗りものの中などで、ゆられながら本を読むことは、目のためによくありませんから、しないように。

三 図書館や、学校の図書室にはいつて本を読む時には、手をあらって、本をよごさないように。

先生はお話が終ると、

「だいぶ時間がたちましたね。このへんで終りましょう。」

とおっしゃったので、大川君は立って、

「きょうは、たいへんよい読書会でした。また、時々読書会を開くことにしましょう。では、これできょうの読書会を終りにいたしましょう。」

と、へい会のことばをのべました。みんなははく手をし、め

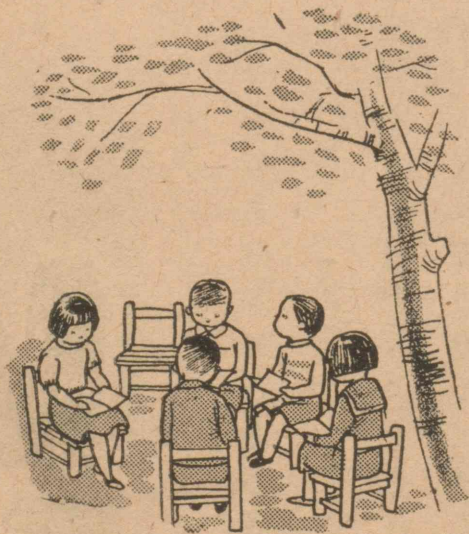
いめいのこしかけを持って教室へ帰りました。

○読書会で読まれた五つの話の要点を  
まとめて記録しておきましょう。

○読んだ本については、読んだ月日や、  
その内容の要点を読書録に記録して  
おきましょう。

○学級や、家の近所のお友だちで、読  
書会を開きましょう。

○読んだ本についてのお話会（発表会）  
をすることも、よいことです。





四 毎日のことば

あいさつのことば



(一)

知っている人どうしが道で会うと、「こんにちは」と、あいさつのことばをかわします。

「こんにちは」だけでは、そのつぎに続くことばがやりやくされているので、特別な意味はないのですが、これだけのことばで、おたがいの心がなごやかになり、気持がいいのは、どういうわけでしょう。もちろん、あいさつのことばは、声だけではなく、

親しみのある表情や態度もそれに加わっておりますが、「おはようございます」「こんにちは」などのことばも、みなそうです。

もし、知っている人どうしが会って、こうしたあいさつのことばをかわさなかったらどうでしょう。顔を見ただけで、知らん顔をして行きすぎてしまったとしたら、いやな気持がするでしょう。そう考えると、この短いあいさつのことばには、人と人との心をなごやかにし、親しく結びつけていくふしぎな力がかもっているように思われます。

(二)

「さようなら」は、別れる時に、ふつうに使うあいさつのことばです。「さよう」ということばは、「そのとおり」「そのよう」という意味であり、「さようなら」となると、「そのとおりなら」「そ

のようなら」「それなら」の意味であります。それが、別れる時のあいさつに使われるのは、「それならば、お別れいたしましたしよ。う。」ということをやくしたことばなのです。このことばも、会った時のあいさつのことばと同じように、人と人との心を結びつけるものであり、親しみの心を深め、なごりをおしませるものです。

別れのあいさつの時に、よく、「よろしく」ということばが使われます。

「お帰りになつたら、おかあさんによろしく。」などと、親しい人から言われることが、よくあります。うちへ帰つて、おかあさんに、「——さんがよろしくとおっしゃいましたよ。」と、お伝えすると、おかあさんは、「まあ、そう。」と言つて、お喜びになります。

「よろしく」と言われたから、「よろしく」と、伝えただけなのに、なにもかもよくわかつているように、喜ばれます。これは、このことばのおくにいろいろなこと、いろいろな意味をふくんでいるからです。

## お礼のことば

(一)

お礼を言う時に使われる「ありがとう」ということばは、「ありがとう」という感謝のことばから変わってきたものです。「ありがとう」ということばの意味は、「なかなかないもの」「あるの

がふしぎなもの」という意味です。つまり、なかなかないものをあたえられた時に、感謝することばであったのです。それが、時代のうつりかわりにつれて、なんでもうれしい時には、顔に喜びをあらわし、「ありがたい」というようになり、これが、今では、「ありがとうぞんじます」「ありがとう」と、お礼を言う時に使われるようになったのだらうと思います。

このように、わたしたちが毎日使っていることばの意味や、そのことばのおこりなどを調べてみることはたいせつなことです。それによって、うっかり使っていることばの本当の意味がわかり、そのことばを正しく使うことができるようになります。

(二)

「ごくろうさま」は、働いてもらったり、ほねおりをかけたり

した時に言うお礼のことばです。「くろう」というのは、「ほねおり」「ごころづかい」の意味ですから、「ほねおりをかけました」ということをていねいに言ったことばです。仕事につかれきった時も、このことばをかけられると、からだや心のつかれがすうつとぬけるような感じがします。

お礼のことばは、口先だけでは本当のことばになりません。感謝の心がこもっているかどうかによって、ことばのひびきかたがちがいます。本当に感謝する心があふれている時こそ、人の心にしみとおりの仕事のつかれもなくすることができるとです。

## 返事のことば

返事のいちばんもどになっていることばは、「はい」ということばと、「いいえ」ということばです。このことばはかんたんなことばですが、場合によってはいちばん言いにくいことばです。このことばをはつきり言うことは、わたしたちの毎日の生活においてたいせつであるばかりでなく、わたしたちの一生においてももつともたいせつなことではないでしょうか。

ことばのよく言えない赤ちゃんの「はい」は、こつくりの身ぶりであり、「いいえ」は、いやいやの身ぶりです。赤ちゃんの考えや心もちは、「はい」「いいえ」の身ぶりではつきり言いあらわされます。そうして、赤ちゃんの返事のたいたいはこれです。

「はい」と、「いいえ」ということばは、このように、心を決め

ることばで、このことばが言いにくいわけは、ことばが言いにくいのではなく、心をどちらかに決めることがむずかしいのです。ですから「はい」「いいえ」ということばはよくよく考えて言わなくてはなりませんし、時には、真の勇氣もいります。このことばには、自信と責任をもつことがたいせつです。

## ていねいなことば

自分より年上の人に対してはていねいなことばが使われています。むかしは身分によってもことばの使い方がちがいで、ていねいすぎたことばが多かったようですが、近ごろは、そうしたことばはだんだん少なくなってきたようです。しかし、今でも、

おとうさん、おかあさん、おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、先生などに対することばづかいは、お友だちどうしに使うことばとはちがって、ていねいなことばが使われています。これは今でもたいせつなことではないでしょうか。たとえば、

「おじさんが来た。」

と言うよりは、

「おじさんがいらっしやいました。」

と言った方が、同じことを言うのにもよい感じがします。

ていねいなことばといっても、むやみにたくさん使うのはかえって変な感じをあたえるものです。そのひとつに、「お」「ご」をつけることばがあります。女の方に多いと思いますが、いろ

いろなもの、いろいろなものの上に、「お」「ご」をよくつけて言う人があります。

「おボール」「お時計」「お新聞」「おラジオ」「ごほうき」——などは、耳ざわりになります。「お」「ご」をつけるにしても、習慣のようになっってしまったている「おべんとう」「おかえり」「ご病気」「ご同情」などは、それほどではありませんが、それにしても「お」「ご」をつけなくてもすむものは、つけない方がよいように思います。

ていねいなことばづかいがよくあやまられて使われる場合は、自分の身内の人のことを人の前で言う時です。おとうさん、おかあさんのことにしても、ていねいなことばは使わないものです。たとえば、

「おうちのおかあさんが午後一時ごろうかがうとおっしゃいました。」

などと言うのは変です。五年生でしたら、

「うちの母が午後一時ごろうかがうと言っておりました。」  
というように、言いました。

ていねいなことばは、相手の人を敬って言うことばですから、  
ていねいに言うのにこしたことはないのですが、それにしても、  
時と場合により、また、度のすぎた言いかたも、かえっていや  
な感じをもたせるものですから、そまつにならないように、  
ていねいすぎないように気をつけることがたいせつです。また、  
ていねいなことばには、ことばによく合った態度がたいせつで  
す。ことばだけをていねいに言ってもそれはだめです。そのこ

とばがその態度にしっくり合っていないことはありません。てい  
ねいなことばの使い方は、わざとらしくないこと、相手の人、  
時と場合とをよく考えて、使い分けることに気をつけましょう。  
なお、ていねいなことばづかいには年れいによる使い方、男、  
女による使い方があります。子供は子供らしい言いかたがよく、  
男は男らしく、女は女らしく言うこともおろそかにしてはなり  
ません。

## ことばは言いよう

「ことばは言いようでかどがたつ」と、よくむかしから言われ  
ています。本当に、ことばは言いようによって、いろいろな感

じを相手にあたえるものです。たとえば、

「そんなことをしてはいけません。」

と言うことを、いろいろに言ってごらんなさい。低い声でゆつくりと言ってみると、やさしく注意された気持になるでしょうし、大きな声で早口に強く言ってごらんなさい。きびしくしかられた気持になるでしょう。

また、同じことばでも時と場合によつて、そのことばの意味も、そのことばから受ける感じもちがいます。

なお、ことばは同じことを言うにしても、言いまわし、言いあらわし方がいろいろあります。それによつて、おもしろかったり、つまらなかつたりします。もつともだいなことは心のもちようです。心のもちようがことばにはつきりあらわれてく

るものです。毎日のことばは、はつきりときびきび言うこと、心を正しく、すなおにし、相手の人の心をきずつけたり、不愉快にさせたりしないようにすることに気をつけることがたいせつです。

○毎日使っていることばについて反省してみましよう。

○ことばはどんな働きをもっているか、心とことばとはどんな関係があるか  
研究してみましよう。

○毎日使っていることばを調べて悪いことばがあったら、なおしましよう。

五 山と海

急に日ざしが強くなり、木々の緑がこく、せみの鳴き声に  
ぎやかになって、天にも地にも、すっかり夏が来ました。やが  
て楽しい夏休みも来ます。ことしの夏休みの計画もたてまし  
う。緑の山がわたしたちをまねき、青い海、白くくだける波が  
わたしたちを待っています。ここでは、山と海の勉強をしまし  
よう。

静かなところ



谷川に木の橋がかかっている、  
橋の上に、  
村の人が通っています。  
木々のみどりはしんとして、  
谷川の上にかぶさり、  
せみの声がいつぱいです。  
ここにはだれも来ません。  
山の中は夜も昼もしんかんとしています。  
美しいながれが、  
何千年も前から、  
すこしも変わらず流れています。  
木々のみどりは、





これからあと、  
また、何百年もあおあおと、  
みどりをつけることでしよう。  
ここでは人の声なぞしません。

### 富士登山

#### 草山三里

中央線を大月駅で乗りかえて吉田むらたに着いたのはもう夕方でした。吉田は富士山の北の登山口です。ここでおじさんの知り合いの大学生の山村さんが加わり、三人になりました。だらだら坂の道は、でこぼこしていても歩きにくい。ぼ

くはよくころびそうになるので、そのたびごとに、

「足もとに気をつけて。」

と、おじさんが注意してくださいました。

空はすつきりと晴れわたっていて、ぼつぽつと星が光り始めました。馬返うまがえしというところに着いたので、そこでひとやすみすることになりました。おじさんはあたりを見まわしながら

「富士山はぞくに草山三里、木山三里、それから石山三里といわれています。こんばんは暗くて何も見えないが、この辺までのすそ野が草山三里にあたる



所です。

と、説明してくださいました。しばらく休んでから

「さあ、行こうか、進君、だいじょうぶかい。」

と、おじさんはぼくの顔を心配そうにごらんになったので、

「だいじょうぶですよ。」

と、ぼくは元気よく足ぶみして見せました。

### 木山三里

道はあいかわらずだらだら坂です。馬返のところまで四、五人の人を見ただけで、さっぱり人に会わないので、ぼくは少し心細くなりました。

「おじさん、富士山にはあまり人が登らないんですか。」

と、たずねますと、

「山開きになってまもないので、まだあまり人が登らないのだらう。しかし、山は七月中があれなくて安心なのだよ。」

それを聞いていた山村さんは、

「吉田で一ぱくして、朝早く登る人が多いのではないでしょうか。」

と、言われたので、おじさんもあいつちをうって、

「そういう人も多いでしょうね。しかし、富士山に登るのは夜にかぎる。だいいちすすしくて登るのに楽だし、夜空が美しいものね。」

と、おっしゃいました。

道はいつの間にか林の中へはいつてしまつて、あたりは暗く、

道だけがぼんやり白く見えました。

「この辺はもうかつようじゆりん帯でしょうね。」

と、山村さんが、おじさんにたずねられると、

「そうです。ぞくにいう木山三里というところですよ。」

と、おじさんはあたりを見ながら答えられました。

### 山小屋のあかり

しばらくみんなだまって歩いて行きました。ふいに、道のそばの木立からチュツチュツと鳥が飛びたちましたので、ぼくはびっくりしました。

「だいぶ夜がふけたなあ。」

と、おじさんはひとりごとのおつしやいました。

「あつ、あんな所に、あかりが見える。あれは何ですか。」

と、ぼくはふしぎに思っておじさんにたずねますと、

「山小屋のあかりだよ。七合目が八

合目あたりらしい。あのあたりは、

あう石山三里で、急に高い上に、

木がないので、遠くからあかり

が見えるのだよ。」

と、教えてくださいました。

道はだんだん急になってきました。だいぶつかれてきました。



ので、五合目の山小屋で休みました。いつの間にか林をぬけてしまっていたが、このあたりは低い木ばかりです。足もただけはどうやらわかるが、あたりはまっくらです。そうして、ずしすぎて寒いくらいです。

「あまり長く休むと、歩くのがいやになるから、元氣を出してでかけよう。」

と、おじさんは、元氣よく歩きだしましたので、山村さんとぼくもそれに続きました。

### 夜空の星

六合目の山小屋には休まずに登って行きました。七、八合目のあかりがちらちら見えます。ぼくはだんだんつかれて、足が

重く、おくれ始めました。あたりは静まりかえっていてなんの音もしません。三人のふむやけ石のくずれる音だけが、「ザク、ザク、ザク」と、くらのやみにすわれるように消えて行きます。時々かいちゅう電燈で足もとの道をてらしては歩いていられたおじさんが、立ち止まって、

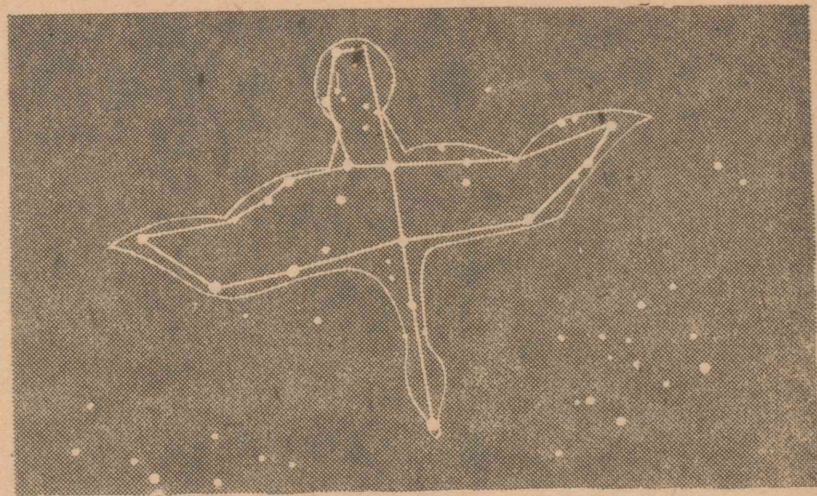
「どうもおかしいぞ、この火山ばいでは登れない。」

と、かいちゅう電燈ですかして見ていられましたが、

「ちよつと待ってくれ、ここは道でないらしい。道をさがして来るから、ここで休んでいてくれ。」

と言つて、下の方へおりて行かれました。山村さんとぼくは、つかれていたのそこへこしをおろしました。

空は雲もなく晴れわたっていて、星がほう石のように美しく



光っていました。

「星に近いせいでしょうか、星の光がちがいますね。」

と、ぼくが話しかけると、山村さんは、「空気がすんでいるからでしょう。じつにきれいですね。ゆめの世界にでもいるような気がしますね。」

と、じつと空を見ていられましたが、「あの強い光をはなっているのが、ベガという星で、そのあたりをこと座というのですよ。その東の方に十字の形をしているのが北十字星で、そのあたり

を白鳥座というのですよ。」

と、星の説明をしてくださいました。

「おい。道が見つかったぞ。」

と、言うおじさんの声でしたので、立ちあがって見ると、おじさんは下の方でかいちゆう電燈をふっつていらっしやいました。ぼくたちは、それをたよりに下へおりて行きました。すると、そこは広くて、ふみかためられた道がありました。

「ここが道だったよ。」

と、おじさんはつぶやきながら歩きだしました。

### 御来光

しばらく前から、下の方で人の話し声が聞こえ始めたと思っ

たら、だんだん近づいて来ました。後を見ますと、白い着物を着た人たちの団体でした。

「やあ、ごくろうさま。」

「ごくろうさま。」

「ぼっちゃん元気ですね。」

と、声をかけて、つぎつぎにぼくたちをおいこして行きました。

やがて東の空がしらんで、星の光がうすらいできました。

七合目で休みました。下の方を見ますと、黒味がかつたはい色の雲がむくむくとたたみのように見えて、とても美しい。その上を歩いてみたいような気持ちになりました。おじさんは、

「あれが雲海だよ。きれいなものだろう。」

と、うつとりとながめていらっしやいました。

「さあ、八合目までがんばって、御来光を拝もう。」

と、おじさんにはげまされて歩きだしたが、足が重い。

「ザクザク、ザクザク」無言で登っていくうちに、だんだん明かるくなってきました。

「御来光だ。御来光だ。」

上の山小屋の方でさけび声がしました。ぼくたちは思わず立ち止まりました。顔を上げると、空はパツと放しやする光線にいろどられ、波のようにた



なびいている雲はくれない色にかがやき、はるかな雲のかなたから、まっかな日は静かにのぼって来る。なんとおごそかな光景だろう。ぼくたちは美しさにうたれてなんとも言ふことができません。思わず頭を下げました。しばらく御来光に見とれていた目をうつすと、雲が切れて、下の方に白く光って見えるものがありました。

「あれはなんでしよう。」

と、白く光っている方を指さしますと、山村さんは、

「山中湖ではないでしようか。」

と、おじさんにたずねました。

「そうだ、あれは山中湖にちがいない。みかづきのようなかたちをしてるから。」

とおっしゃって、地図をだして見ておられました。

「たしかに山中湖です。」

と、おっしゃって歩きだされました。道はいよいよ急になりだしました。ぼくはすっかりわすれていたキャラメルをポケットから出して、おじさんや山村さんにもあげて、口に入れました。

### ちよう上へ

日はかんかんとてりつけてきました。だが山の空気はひやひややして冷たい。だんだん登って来る人たちがふえてきました。九合目をすぎると、ちよう上はすぐそこに見えるが、なかなかたどりつかない。富士山の山のかたちはここではさっぱりわかりません。石ころばかりの山で、これまで遠くでながめて

いた富士山ではないような気がしました。とりいが見えて、いよいよちよう上にたどり着きました。ちよう上はなかなか広くて公園のような感じがしました。石できずかれたしつかりした建物もありました。

「あれは気象観測をしている所です。この高いところで、一年中雨の日も風の日も気象を観測しているのです。風や雨で山があれいている時には、登山はき険ですということを知らせてくださるのも、この人たちです。このおかげで、登山する人々はどんなに助かっているかしれません。ここで調べた気象の変化は、東京の中央気象台に知らせ、天気予報の資料にもなるので、日本国中の人々は、そのおかげをうけているのです。そのほか、ここではいろいろな気象の研究をして、人

々のために役立つ仕事を休みなく続けているのです。」

と、おじさんは説明してくださいました。

ちよう上は風が強いので山小屋の中にはいり、ここでおべんとうをいただき、ひとねむりしました。目をさました時は午後二時ごろでした。それから、おじさんの案内でおはちまわりをし、万年雪を見たり、ちよう上のスタンプをおしてもらったりしました。下山は須走口<sup>すしり</sup>をえらびました。

#### 須走口へ

須走口は道が急で、それにすなが多くてすべるといっているので、横わらじをつけました。横わらじというのは、わらじの上にもう一足横にはくわらじで、すべり止めと、わらじがいたまない



ようにするためです。

「さあ、出かけよう。」

ぼくと山村さんはおじさんのあとについてくだり始めました。やけ石や火山ばいがはてしなく続いていて、一足ごとにわらじはやけ石の中にうずまってしまふ。じつと立ってはいられないくらいの急な道なので、「ドサツ、ドサツ」と力強くふんでまっすぐにくだって行く。つう快なほど早い。

「なるほど、これはすな走りだ。あ、もう九合目ですね。まだ十分もたたないのになあ。あそこに山小屋が見える。」

と、山村さんは、早口にしゃべりながらどんすべって行く。「こんなにくずれやすいやけ石で、よくもこれほど高い山になったものだなあ」と、ぼくはふしぎに思いました。

八合目、七合目はまたたく間にすぎました。六合目にさしかかったころ、下の方からきりがわいて来て、やけ石のしゃ面をほうようにあがって来ました。みるみるうちに六合目もかくれ、ぼくたちはすっかりきりにつつまれてしまいました。

### 富士あざみ

五合目でこしをおろして休みました。ここへ来ると、たけの低い木が群をなしてはえているのが見えだしました。ぼくはのどがかわいてたまらないので、おじさんにねだって、水をのませてもらいました。その水のおいしかったこと、水がこんなにおいしいものとは、今まで知りませんでした。水をのんだので、だいぶ元気になり、それに道はふみかためられた歩きよい道に

なつたので、よほど楽になりました。

三合目あたりまでは、たけの低い木ばかりがはえていて、めずらしい植物はありませんでした。ここをすこしくだると、道はしだいにだらだら坂になり、道の左手にやけ石がほりとられた谷があり、そこに草むらがあつて、その中に大きなあざみのようなものが見えました。

「おじさん、あれは何ですか。」

と、ぼくが指さすと、おじさんは

「いいものを見つけたね。あれは富士あざみといって、日本一の大あざみですよ。行ってみよう。」

と、おっしゃつたので、そばへ行ってみました。



「ずいぶん大きいですね。」

と、山村さんはおどろいたように言いました。

富士あざみの高さは、ぼくのむねのあたりぐらいもあつて、その葉には、白いすじがあみの目のように通つており、葉のふちにははりのとげがあつて、さわるといたい。ぐんとのびたくきのいただきには、ひとにぎりもあるかと思われるような、赤むらさき色の花がさいており、葉と花のあざやかな色と、がちりちりやけ石のなかからはえ出た、たくましいすがたは実にみごとなものでした。

道はいつのまにか、ならや、くぬぎの林の中へはいり、青葉を通して日光がやわらかに道にさしこんでいて美しく、すずしい風がふいて来てとても気持ちがいい。この道をしばらく歩いて

いるうちに茶屋が見えてきて馬返へ着きました。

馬返の茶屋でお茶をいただいたいてると、自動車が来ましたので、ぼくたちは富士山にさようならをして、自動車に乗り、御殿場へ向かいました。

「無事でよかった。夫気にめぐまれ、ゆ快な登山だったなあ。」と、つぶやきながらおじさんはにこにこしておられました。

○夏休みが近づきました。うれしくてたまらないでしょう。夏休みに海へ行って泳いだり、山へ登ったりしたことを、細かに文につづりましょう。作文は、自分にわかるだけではなく、人にもよくわかるように、お話をするような気持で書くことがたいせつです。

○夏は、山も海も川も、植物も動物も、みんな強い日光をあびていきいきとしています。そのようすを詩に作ったり、はい句や短歌に作ってみましょう。う。詩、はい句、短歌は、美しいものや、心に強く感じたことを、短いことばで、自然な調子で書き表わすことがたいせつです。

### 海の歌

#### よびかけ

前列	1 2 3 4	(1 4 は男、2 3 は女)
後列	5 6 7 8 9	(5 7 9 は男、6 8 は女)

まくあく (波の音……)

1 空と、

2 海と、

男全 海と、

女全 空と、

4 その一線に、

3 さす光……。

1 夜があけた。

全員 夜があけた。

1 光だ。

2 雲だ。

3 あかねいろ 波にくだけて、

4 しお風は 朝をよぶ、

全員 朝をよぶ……。

後全 ポン、 ポン、 ポン、 ポン……

(だんだん低くなり「はたをあ  
げて」のところで消えてしまふ……)

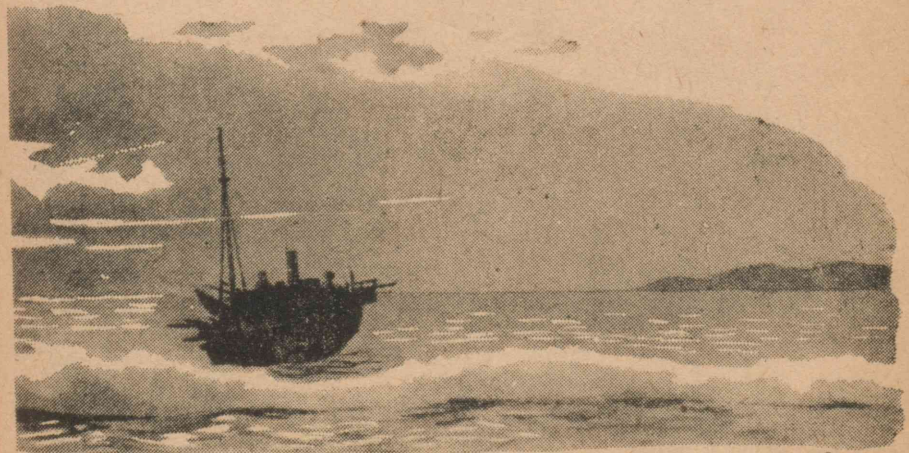
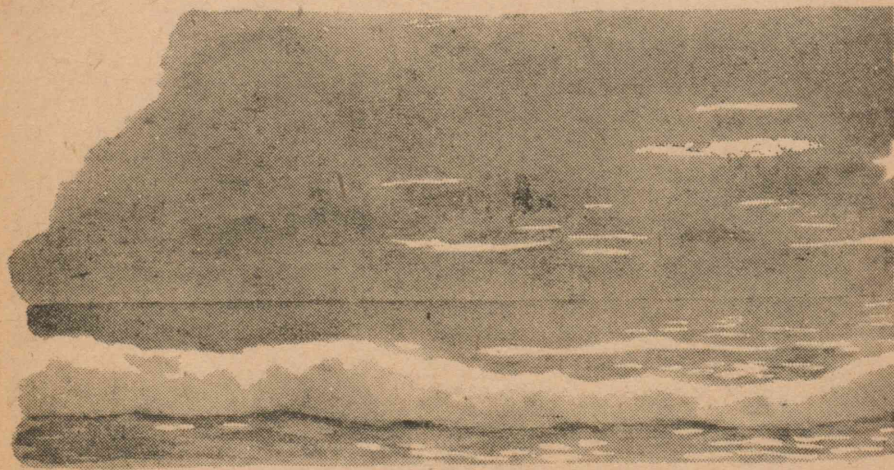
1 かもめ。

2 かもめ。

3 船が出る。

4 夏の日 海の青さに

1 はたをあけて 船が出る……。



2 波どんど、  
 1 波どんど、  
 3 てりかえり、  
 4 はねかえり、  
 5 波は ぐだけて、  
 9 日に おどる。  
 全員 朝日に おどる。

—— 全員 ハミング（口をどじて鼻で歌うこと）で海の歌……

5 ぶ台の右手に出てくる。

5 カのかぎり声を出してみる。海の向こうまでとどけと  
 声を出してみる。わたしの声は波の音にのまれてしま

う。わたしは、思いきり両手をひろげ、むねいっぱい  
 に空気をすう。わたしは、うれしくなる。すがすがし  
 くなる。カがからだにあふれてくる……。

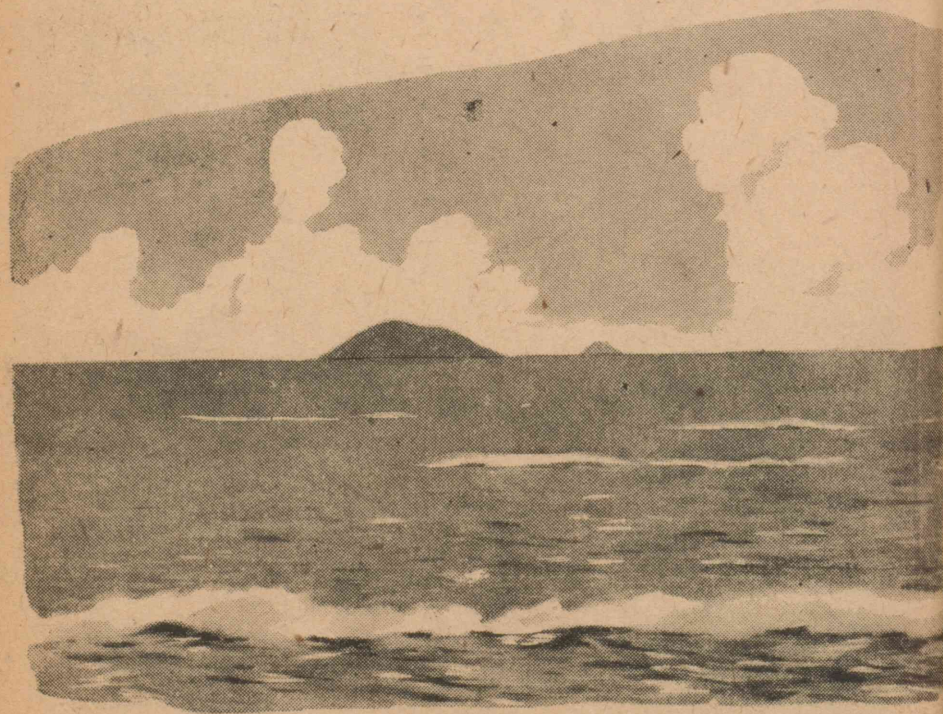
わたしはおきの方を見つめる。父の船が帰って来るこ  
 ろだ。むなもとまでさかなのうるこをつけた元気な父  
 のすがたが目にかぶ。わたしは、はだして波うちぎ  
 わを走る。足の下で海草が音をたててはじける。わた  
 しは、しぶきをあびて朝のはま辺を船着き場に走り続  
 ける……。

（終ってもとの位置にもどる）

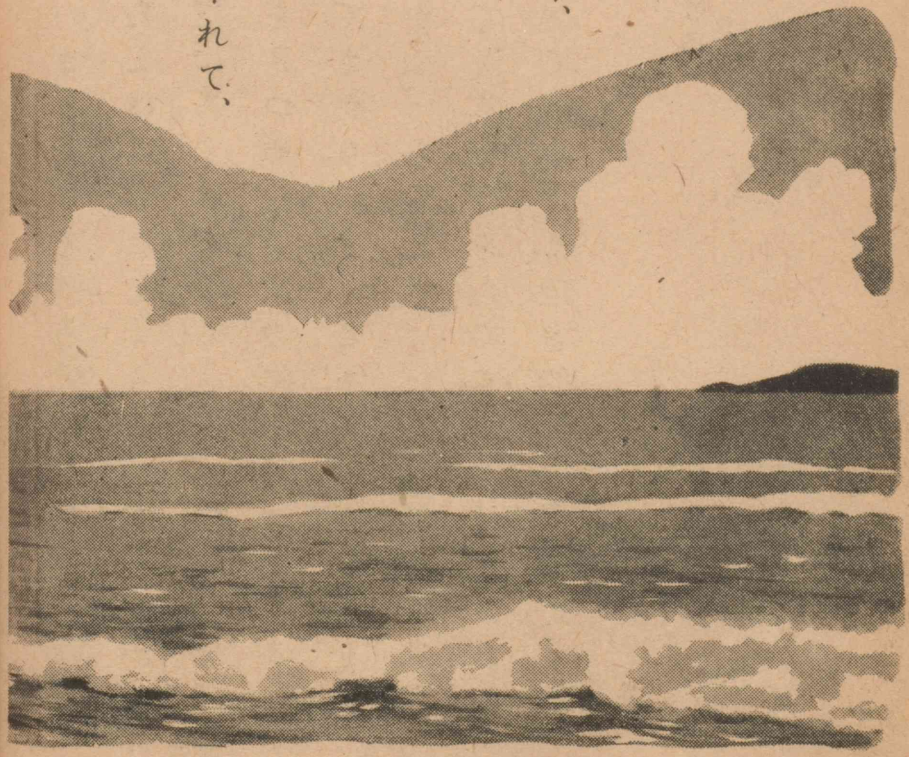
1

きら、

後全 光る、  
 1 夏のこの空。  
 2 はるばると、  
 3 海の広さよ、  
 1 ふきわたる、  
 4 風も かがやき、  
 3 風も かがやき、  
 前全 きら、ら  
 後全 きら、ら  
 1 夏の日の、  
 全員 海の夏の日。



2 きら、ら  
 男全 きら、  
 女全 きら、ら  
 1 空のまぶしさ。  
 4 青空に 雲は白く、  
 2 むく、  
 3 むく、  
 4 むく、  
 6 もりあがる。  
 7 青空に 雲はふくれて、  
 全員 きら、きら、ら  
 前全 光る、



全員 ハミングで海の歌……

8 ぶ台の左手に出てくる。

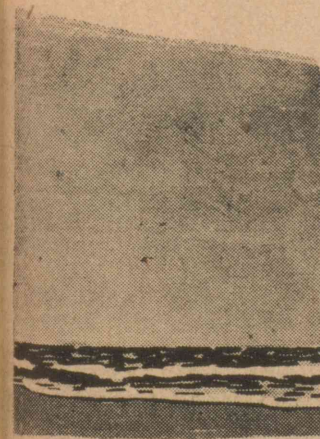
8

わたしは、やけたすなをけつて波うちぎわを走る。  
波が足をあらう。わたしは、うちよせる波をめぐりか  
進んで行く。そうして、大きなうねりからだをまか  
せる。なにもかも聞こえなくなる。わたしは、目をあ  
げて空を見る。天と水と、その中にわたしだけがいる。  
わたしは、なにもかもわすれてしまふ。そして海の人  
魚のように、夏の真昼の海に  
ただよい流れる……

(波の音)

ハミングで海の歌……

8 もとの位置にもどる。



1

入道雲が ちぎれる。

4

海の色が かわる。

2

さ丘に かげが さす。

3

月見草が 小さな頭を もたげる。

1

燈台のあかりがつく。

前全

日がくれる。

後全

海がくれる。

1

空と、

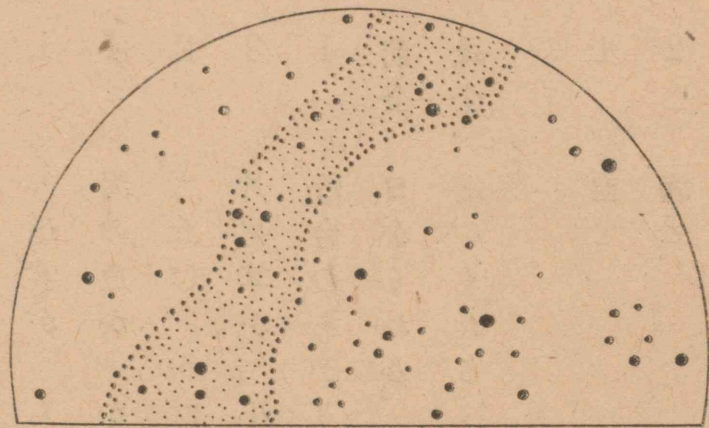
2

海と、

前全

海と、





後全 空と、

1 その一線に

2 光は

3 海は 消える……。

4 海辺に立てば、

1 天の川

2 遠い かなたに、

3 海が 鳴る

1 とどろ

2 とどろ

3 4 海が鳴る……。

ハミング、しだいに高まって、静かにまく

「海の歌」は、朝と昼と夜の海の美しさを短く歌ったよびかけ  
げきです。これを演出してみましよう。

写生風なものですから、あんまりきばらないで演出してくだ  
さい。朝のところ、ポンポンじょう気の音は、後列の全員で  
うまく入れてください。あとにあるハミングと同じように、そ  
れにかぶせることばがありますから、そのことばをじゃましな  
いようにそのことばの感じを助けるように気をつけてください。  
光だ、雲だ。——は光だア、雲だアとのばさないでください。  
波の音は、大きなこうりの中にだいずを入れて、それを左右に  
かたむけたり、急にゆすりあげたりすると波の音の感じが出ま



すから、やってごらん下さい。昼のところでは、「きらきら」という音がいくども出てきますが、きれいに光っている感じを出してください。これも、きらアきらアとのばさないように気をつけてください。ハミングは、朝と昼はわりあいに強く、夜は弱くやわらかく高めて、まくまでもっていくこと。

ことばの表

あいづち……………	空五	いしやまさんり……………	空三	らんかい……………	空二	おろそか(に)……………	空七
あおあお(と)……………	空二	いじる……………	空七	うんばん……………	空七	カーン……………	空三
あおば……………	空一	インハヤ……………	空一	えいよう……………	空三	かがくしゃ……………	空一
あかねいろ……………	空四	いためて(いためる)……………	空六	えきたい……………	空一	かがくせいひん……………	空七
あきち……………	空一	い……………	空七	えんしゅつ……………	空一	かくち……………	空八
あさひ……………	空六	いっしゅ……………	空八	エルバとう……………	空二	かざん……………	空一
あしぶみ……………	空四	いっしょう……………	空三	おいこして(おいこす)……………	空二	かざんはい……………	空九
あまのがわ……………	空三	いっせん……………	空三	おうよう……………	空四	がすたい……………	空一
あま……………	空七	いっばく……………	空五	おおぞら……………	空六	がっちり(と)……………	空一
アメリカ……………	空三	いりえ……………	空九	おおつきえき……………	空二	かど(がたつ)……………	空七
あやまられて(あやまられる)……………	空五	いろどられ(いろどられる)……………	空五	おかえり……………	空二	かなた……………	空二
ありったけ……………	空四	いわば……………	空五	おがもう(おがむ)……………	空三	かならず……………	空二
アルプスさんみゃく……………	空五	うかがう……………	空七	おごそか(な)……………	空三	かぶさり(かぶさる)……………	空一
あれなくて(あれ)……………	空五	うきくさ……………	空五	おたがい……………	空六	かえして(かえす)……………	空二
あわつぶ……………	空八	うすらいで(うすらく)……………	空二	おはちまわり……………	空七	かまわす……………	空三
いいあらかた……………	空八	うづりかわり……………	空二	おべんとう……………	空五	ガリレオ……………	空一
いいまわし……………	空八	うでどけい……………	空六	おもいがけなく……………	空九	かるく(かるい)……………	空二
いいん……………	空三	うばい……………	空六	(おもいがけなく)……………	空九	か……………	空二
いか……………	空九	うまがえし……………	空六	おもいきり……………	空三	かわし(かわす)……………	空六
いけ……………	空八	うみのおや……………	空一	おやこ……………	空九	かんけい……………	空九
いじゅつ……………	空四	うるこ……………	空七	オランダ……………	空六	かんこうち……………	空八

かんじゃさん……………十一  
 ○きえて(きえる)……………八  
 きかん……………十四  
 きぎ……………卒  
 きげん……………卒六  
 きじゅうつ……………卒七  
 きしょうかんそく……………卒六  
 きすかれた(きすか  
 れる)……………卒六  
 きすついたり(きすつく)十一  
 きせつ……………卒六  
 きそく……………卒五  
 きたじゅうせい……………卒  
 きぬおりものるい……………卒七  
 きばらないで(きばる)……………卒三  
 きびしく(きびしい)……………卒八  
 きやくてん……………卒五  
 きやまさんり……………卒三  
 キヤラメル……………卒五  
 きゅうかい……………卒四  
 きょうかいどう……………卒七  
 きり……………卒九  
 きろく……………卒五  
 キロメートル……………卒二  
 きんかい……………卒九  
 くあい……………卒三

ぐあい……………十四  
 くぎ……………十二  
 くさやまさんり……………卒三  
 くじら……………卒九  
 くすれる……………卒九  
 くだ……………十  
 くだけて(くだける)……………卒四  
 くちさき……………卒一  
 くみあわせて(くみ  
 あわせる)……………卒七  
 くらやみ……………卒九  
 くりひろげられて……………卒九  
 (くりひろげられる)……………卒九  
 くないいめ……………卒四  
 くらみがかった……………卒三  
 くわわって(くわわる)……………卒七  
 ぐんとう……………卒二  
 ○げきん……………卒七  
 けしき……………卒六  
 げつようび……………卒二  
 けんせつ……………卒八  
 けんめい(に)……………九  
 ○こうか……………卒七  
 こうぎょう……………卒七  
 こうけい……………卒四  
 こうげん……………卒六

こうせん……………卒三  
 こうち……………卒六  
 こうてい……………十一  
 (しち)ごうめ……………卒七  
 こうり……………卒三  
 こうれつ……………卒三  
 こくじゅう……………卒六  
 こころづかい……………卒一  
 こころみで(こころみる)……………卒三  
 こしかけ……………卒四  
 こすりはじめた……………卒三  
 (こすりはじめる)……………卒三  
 こたい……………卒  
 こだち……………卒六  
 こつくり……………卒三  
 ごてんば……………卒三  
 ごどうじょう……………卒五  
 ことぎ……………卒  
 こなせる(こなす)……………卒三  
 このかた……………卒  
 ごぶんのさん……………卒八  
 ごほうき(ほうき)……………卒五  
 ゴムかん……………卒五  
 こむぎこ……………卒八  
 こもつて(こもる)……………卒七  
 ごらいこう……………卒一

ゴ  
 ゴンしゅう……………卒四  
 ゴんど……………卒二  
 ゴんには……………卒六  
 ゴんばん……………卒三  
 ゴんばんは……………卒七  
 ○さえずり(さえずる)……………卒四  
 ザカリアス・ヤンセン……………卒七  
 さきゅう……………卒一  
 ザク・ザク……………卒九  
 さぐり(さぐる)……………卒一  
 さしかかった(さし  
 かかる)……………卒九  
 さめ……………卒九  
 さよう……………卒一  
 さようなら……………卒七  
 さんぎょう……………卒九  
 さんち……………卒六  
 ○ジエームス・メティウス……………卒二  
 しおかせ……………卒五  
 しかいし……………卒三  
 しくみ……………卒五  
 しごとば……………卒六  
 じじつ……………卒四  
 じしん……………卒一  
 じだい……………卒

しつ……………卒七  
 しつくり……………卒六  
 じつさい……………卒五  
 じどうしゃ……………卒八  
 しぎ……………卒七  
 しみとおり(しみ  
 とおる)……………卒一  
 しゃせいふう……………卒三  
 しゃめん……………卒九  
 じゅうじ……………卒一  
 じゅうぶんのいち……………卒六  
 じゅうみん……………卒七  
 しゆるい……………卒四  
 しょうこ……………卒二  
 しょうぶつ……………卒七  
 しらんで(しらむ)……………卒二  
 しりょう……………卒六  
 しわ……………卒四  
 シンガーポール……………卒八  
 しんかん(と)……………卒一  
 しんきゅう……………卒四  
 しんこう……………卒三  
 しんさつ……………卒五  
 しん(の)……………卒三  
 ジンベザメ……………卒九  
 じんるい……………卒五

○スイス……………卒五  
 すいりょくでんき……………卒七  
 すうにん……………卒一  
 すかして(すかす)……………卒九  
 すすしい……………卒三  
 すすむ(くん)……………卒四  
 スタンプ……………卒七  
 すなお……………卒九  
 すなばしり……………卒八  
 すばしりぐち……………卒七  
 すわれる(すう)……………卒九  
 ○せ……………卒一  
 せい(で)……………卒  
 (じゅうしち)せいき……………卒六  
 せいさく……………卒七  
 せいじ……………卒九  
 せきにん……………卒三  
 ぜつべき……………卒八  
 せみ……………卒  
 せんそう……………卒一  
 せんはっぴやく……………卒一  
 じゅうよねん……………卒一  
 ぜんれつ……………卒三  
 ○ぞうげせい……………卒五  
 ぞく(に)……………卒六  
 そそいで(そそぐ)……………卒六

そとがわ……………卒  
 そよそよ(と)……………卒三  
 たいおんけい……………卒一  
 だいがくせい……………卒二  
 たいして……………卒九  
 だいす……………卒三  
 だいすき……………卒七  
 たいど……………卒七  
 たいよう……………卒四  
 たい……………卒八  
 たき……………卒六  
 たくましい……………卒一  
 ただの……………卒五  
 たたまれて(たたまれる)……………卒九  
 たちどまって……………卒  
 (たちどまる)……………卒一  
 たどりつかない……………卒五  
 (たどりつく)……………卒五  
 たなびいて(たなびく)……………卒四  
 たにま……………卒六  
 たらたらさか……………卒二  
 たんか……………卒三  
 だんたい……………卒三  
 ○チーズ……………卒七  
 ちえぶくろ……………卒六  
 ちからづよく……………卒六  
 (ちからづよい)……………卒八

ちきゅう……………卒九  
 ちぎれる……………卒一  
 ちやや……………卒三  
 ちゅうおうきしょう……………卒六  
 だい……………卒六  
 ちゅうおうせん……………卒二  
 ちゅうぶ……………卒五  
 チュッチュッ……………卒六  
 ちょうし……………卒三  
 ちょうじょう……………卒六  
 ちょうしんき……………卒一  
 ちよっけい……………卒二  
 ちりょう……………卒七  
 ○つうかい……………卒八  
 つきみそう……………卒一  
 つけくわえましよう……………卒一  
 (つけくわえる)……………卒三  
 つたわる……………卒三  
 つぶやいた(つぶやく)……………卒五  
 つめたい……………卒五  
 ○てきとう……………卒六  
 てこぼこ……………卒三  
 てつどう……………卒九  
 てりかえり(てり  
 かえる)……………卒六



Copyright 1950, by  
The Kyōiku Tosho Kenkyūkai

All rights reserved

The text of this publication or any part thereof  
may not be reproduced in any manner whatsoever  
without permission in writing from the authors.

小国 521

五年生の国語 上

Approved by Ministry of Education  
(Date 1950)

感謝  
左の作品を本書に掲載させて  
いただきましたことについて、著  
者諸先生に心から感謝をいたし  
ます。なお、規則や指示にしたが  
つて多少加除訂正のやむをえなかつ  
たことについて御諒解をお願い  
いたします。

ほんきになつて……武者小路実篤  
つばめはとんでくる……丸山 薫  
聴診器はどうして発明され  
たか、望遠鏡が発明される  
まで……渡辺軍治  
山の国スイス……尾崎寅四郎  
フェア・プレイ……三原 修  
静かなところ……室生犀星  
海の歌……栗原一登

本書の指通書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のもの無断發行を禁ずる。

發行所

学校図書株式会社  
東京都港区芝三田豊岡町八番地

印刷者

図書印刷株式会社  
東京都港区芝三田豊岡町八番地

発行者

学校図書株式会社  
東京都港区芝三田豊岡町八番地

著作者

財団法人教育図書研究会  
代表者 川口芳太郎

印刷  
昭和二十五年

月 日

定価 円

表紙 田原輝雄

さしえ

大槻定雄 小島忠治 森下幹治 青木幹治 花田哲幸 田中豊太郎 佐藤保太郎 佐藤保太郎 田中豊太郎

編者

理事 長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎  
担当執筆者 東京高等師範学校教授 田中豊太郎  
東京高等師範学校教諭 佐藤保太郎

東京都文京区大塚窪町  
東京高等師範学校附属小学校内  
財団法人教育図書研究会

漢字の表

弱	揮	責	固	快	技	適	得	歴
94	73	58	40	34	27	18	13	6
冷	任	皮	例	輸	便	伝	史	
75	53	40	35	28	19	13	6	
象	慣	億	規	河	判	応	消	
76	55	41	35	28	25	14	8	
險	省	群	則	湖	耕	官	(聴)	
76	59	42	35	28	26	14	10	
資	央	万	守	各	低	救	(診)	
76	62	42	35	28	26	15	10	
(殿)	(吉)	容	直	達	牧	製	管	
82	62	42	37	29	26	15	10	
句	坂	栄	(徑)	産	価	際	争	
83	62	43	37	29	27	15	11	
位	(御)	情	約	政	絹	非	養	
87	21	47	37	29	27	17	11	
置	団	態	粉	録	織	常	従	
87	72	47	38	31	27	17	11	

文庫  
50  
746

広島大学図書  
広島大学図書  
0130449746  


おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。